



寺報 ともしび

金剛山大長寺
令和三年一月一日発行
第十三号



善い教えに出会う福など十種類あるとされる毘沙門天王の福德と小田原七福神まつりについて熱く語られる康哉師（下は毘沙門天像）



万福多幸を祈願

住職 安藤 康哉
あん どう こう さい

現今、新型コロナウイルスの流行により、宗教や宗派の壁を越える動きが起きています。かつて二宮尊徳翁は、人生最大の危機の時、成田不動へ断食、祈願をしたと伝えられています。

神仏への祈願は、心ある人にとっては大きな支えとなっているのではないかと。ご縁をいただいております皆さまにとつても潮音寺毘沙門天は植松房枝先生の靈感よりお導きやまた不可思議な霊力による幾多の事象を受けつぎ、伝えられています。

小田原七福神の毘沙門天を第一番札所としてご縁を結んでいただいております。

昨秋九月四日、北野天満宮では五百五十年ぶりに比叡山延暦寺の僧侶と合同で疾病退散の願いをこめて北御霊会（きたのこれいかい）が行われました。法要後、北野天満宮の宮司さまが「仏さまと神さまと一緒に祈ります。これは人生最高の感動でございました」とテレビで記者会見されたのが印象的でした。

今年を生きる 今を生きる

副任職 安藤 道隆

世情は、コロナ禍により、大きく様変わりいたしました。例年、年末は忘年会で賑わっていた街中も、会食が一つの感染拡大の要因となつていることから、人影がまばらな状況でありました。

古くは『日本書紀』に、崇神天皇の時代に疫病が流行し人口の半数が亡くなったことが記されています。その記載によると、感染予防として、手足・口・顔などを水で洗い、外出しないことが奨励されています。現代においても、概ね感染予防

上、蔓延しつづけたことはありませぬ。収束するまで、どれだけの期間が経過するのかが今年の焦点であります。

一方で、コロナ禍により、今まで当然のように行えてきたことが、できなくなったり、家族が入院してもお見舞いに行けなくなるなど普通に会えた方がたと会うことができない状況が生じております。

当たり前のようにお会いしてた方に会えなくなると、コロナが流行する前に、会って話ができきたことが、どんなに貴重なことであつたか、もつとこんなことを聞いとけばよかったと、そう思わずにはおられません。おそらく、以前にお会いした時は、そんな想いで会つたつもりもなく、ただの日常生活の1コマであつたと思います。身内なら尚一層のことであります。人は、今までできたことが出来なくなると、その時を惜しむことがあります。今、一番大事なこととは、「今を生きる」ということではないでしょうか。変えられない過去に執着することなく、未来に不安を抱えることなく、今、「いただいた命」に気持ちを向けて、生かされている事実に向かいをいたすことで、自ずと感謝の念が生じてくるのではないのでしょうか。自分を生かさせていただいた「亡き人」と縁のある「ご先祖さま」に手を合わせ、眼を閉じれば、「今を生きる」鋭気が湧いてくるのであります。

今年も改めて、ご先祖さまへの感謝とともに一日一日をいただき、あたり前の日常に戻りますよう、コロナ感染が収束することを祈るばかりであります。

特別志納者の紹介

道元禪師の言葉

「法は是れ食、食は是れ法なり」

道元禪師『赴粥飯法（ふしゆくはんぼう）』より

院代 安藤嘉則

道元禪師は二四歳で南宋（中国）に渡り、修行僧たちとともに坐禅堂で作法通りに食事を

いたたく生活を通じて、食事が単に体を養うだけではなく、心を育み、人格を高めていく大切な修行の場であることを知りま

す。また修行僧たちのために身を粉にして食事づくりにつとめる典座（てんぞ）という役目の和尚の姿に、炊事などの作務（労働）にもかげがえのない意味があることに気づきます。

このように中国での体験をふまえて書かれたのが、『赴粥飯法』（粥と飯に赴く法）と『典座教訓』（てんぞきょうくん）です。ここに紹介した「法は是れ食、食は是れ法なり」（食は仏法そのものに他ならない）と

いう言葉には、食に真贋に向き合う道元禪師の姿勢が表明されています。

永平寺をはじめとする禅寺の修行道場では、毎朝（夏は三時ごろ、冬は（四時ごろ）、振鈴（起床の鈴）とともに起床し、坐禅や朝課（朝のお勤め）の後、坐禅堂の中でお袈裟を付けお粥をいただきます。食べる前には、一同が応量器（食器）を開き、「五観の偈」などを唱えるなど、道元禪師の頃から今も変わらぬ作法でいただきます。この「五観の偈」というのは、「一つに

る五つの偈（詩）です。いただく食物に対して感謝の念をもちつつ、大勢の人の労力がかけられたこの食事を自分自身がこの食を受けるにふさわしい行いをしているのかを顧みつつ、仏道を成就するため、今まさにこの食事をいただきますよう、という心構えがここに示されています。こうした「五観の偈」などを唱えながらお粥をいただくのですが、坐禅堂内は沈黙の世界となり、タクアンなどをポリポリ噛んだり、少しでもお椀を不用意に扱うと、その音が堂内に響き渡ります。

とここで普段、私が勤めている駒沢女子大学は学校法人駒沢学園の女子高等教育機関ですが、学園は中高・短大も擁しています。駒沢学園の中学生・高校生は伝統的に昼食においてこの「五観の偈」を唱えてきました。現在は中学・高校において毎週水曜日に「会食」の時間が

設けられ、生徒と教員が教室において合掌しながら「五観の偈」を唱え、無言で食事をしていきます。本学はこれを大切なアイデンティティとして受け継いできたのであり、こうした日々の体験が、卒業してからも生徒たちの大切な心の財産となっていくことでしょう。

現在、新型コロナウイルス感染症のため、楽しく語らいながら食事をとることができない状況が続いています。こうした時期だからこそ、自己を見つめ直し感謝の念をもって静かに食事に向き合う「五観の偈」の心を顧みることも必要なのではないでしょうか。

「五観の偈」などを唱えるなど、道元禪師の頃から今も変わらぬ作法でいただきます。この「五観の偈」というのは、「一つに

は、功の多少を計り彼（か）の来処を量る（一つめは今いただく食事が大勢の人々の力によってつくられたことを改めて思い起こします）」をはじめとする

五つの偈（詩）です。いただく食物に対して感謝の念をもちつつ、大勢の人の労力がかけられたこの食事を自分自身がこの食を受けるにふさわしい行いをしているのかを顧みつつ、仏道を成就するため、今まさにこの食事をいただきますよう、という心構えがここに示されています。こうした「五観の偈」などを唱えながらお粥をいただくのですが、坐禅堂内は沈黙の世界となり、タクアンなどをポリポリ噛んだり、少しでもお椀を不用意に扱うと、その音が堂内に響き渡ります。

とここで普段、私が勤めている駒沢女子大学は学校法人駒沢学園の女子高等教育機関ですが、学園は中高・短大も擁しています。駒沢学園の中学生・高校生は伝統的に昼食においてこの「五観の偈」を唱えてきました。現在は中学・高校において毎週水曜日に「会食」の時間が



料理をつくることも修行である。いや、修行ができた者にこそ許される仕事なのだ。

典座教訓の絵は『坐禅ひとすじ』（角田泰隆著、大本山永平寺版）引用

逝去の方々と命日



婦人会会長

山室みゆき

四月より大長寺婦人会会長
となりました山室です。

コロナ感染拡大により総会
も中止となり、活動も出来な
いまま現在に至りました。
コロナ終息のおりには、会
員の皆さまと、以前のように
交流し活動をしていけたらと
考えておりますので、ご協力
のほど、宜しく願います。

白梅の香りゆかしき法の庭

集いて詠ふ安らぎの詠歌

梅花講理事長

諸星 末子



六十年を超える大長寺梅花講の歴史にも又 新しい年が明けま
した。

方丈様初めお檀家の皆様は元より講員御一同の益々のご健勝を
ご祈念申し上げます。

現在梅花講員は十五名で以前に比較すると数の上では淋しい限
りですが、皆様が楽しく集う事が何よりと感謝致しております。

梅花流詠歌は、歌を競うのではなく、心の安らぎと互いの幸
せを念（ねが）う楽しい歌の集いです。是非ご参加くださる方を
お待ちしております。